

札幌学院大学における発達障害学生支援に向けた 全学必修型 FD/SD 研修会の効果と課題

末吉 彩香¹田中 敦士²

要 旨

札幌学院大学における発達障害を含む多様な学生支援の拡充に向け、全教職員を対象に「令和3年度発達障がいのある学生への教育支援 FD/SD 研修会」を実施した。本稿の目的は、参加者向け事後アンケートの結果から本研修会が発達障害学生支援に関して教職員に与えた効果を評価し、今後の学内研修の展開を示すことである。オンラインで実施された研修会終了後に参加者（132名）に事後アンケート（WEB）への回答を求め、71名の教職員が回答した。事後アンケートの結果、全教職員を対象としたことが多様な学生に対する支援に向けた全学的な理解啓発に寄与したことが推察された。また研修会参加前と比較し、参加後の方が発達障害学生支援に関する知識について参加者の自信が高まり、本研修会が発達障害学生支援に関する基礎的な知識提供の場として機能した可能性が示された。一方で発達障害学生支援に関する知識に一定程度自信がある場合でも実際の学生対応には自信がない教職員の存在もうかがえ、今後の学内研修会では知識を実際の支援の場に結び付けるための工夫が必要であると考えられた。

キーワード：発達障害、修学支援、就職支援、FD/SD 研修

1. 問題と目的

現在、発達障害学生が1名以上在籍している高等教育機関は高等教育機関全体の約62%におよぶ（独立行政法人日本学生支援機構，2021）。在籍校に障害を開示していない学生や、医学的診断はないが発達障害の特性を持つ学生の存在を考慮すれば、統計に示される人数以上の学生が発達障害の特性による課題や困り感を抱えながら修学している可能性がある。

札幌学院大学障がい学生支援参考資料（2021）によれば、2019年時点で札幌学院大学に在籍する学生のうち、発達障害のある学生は15名である。同資料によれば発達障害学生は5年連続で入学しており、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由学生と比較して在籍数が多い。このような状況から、学内に発達障害学生に対する恒常的な支援体制を整備し、修学や就労に関する支援を

提供することが期待されている。

全国の高等教育機関において、支援障害学生（学校に支援の申し出があり、それに対して学校が何らかの支援を行っている障害学生）の有無を問わず障害学生支援に関する組織的な活動や取り組みを実施している学校は全体の約91%で、実施率の高い順に「障害学生に対する就職支援やキャリア教育支援」、「不当な差別的取り扱いや、障害を理由とするハラスメントを防止するための取り組み」、「支援情報の公開」等があげられる（独立行政法人日本学生支援機構，2021）。いっぽうで同調査では、障害学生支援に関する活動や取り組みの中で「障害学生支援に関する（学内）研修」を実施している高等教育機関は全体の28.7%にとどまっている（独立行政法人日本学生支援機構，2021）。2021年5月に可決、成立した障害者差別解消法の改正法施行に伴い、今後は私立大学を含む民間事業者にも合理的配慮の提供が義務付けられる。このような社会情勢の変化も鑑み、学内研修会等で教職員が障害学生支援および合理的配慮提供に関する基本的な知識や組織とし

¹ 株式会社 Kaizen: sysueyoshi@kaizen-lab.com.

² 札幌学院大学 人文学部人間科学科;
atanaka@sgu.ac.jp.

での対応方針を共有する必要があると考えられる。

札幌学院大学は日本学生支援機構の障害学生修学支援ネットワーク拠点校として、地域の障害学生支援の中心となり学生支援に取り組んできた。また、2019年度より「発達障がいのある学生への教育支援事業」が実施されており、発達障害学生に対する修学・就職支援に向けた他大学・関連機関との連携や、今後の学内支援の在り方に向けた議論の機会が提供されている。発達障害を含む多様な学生が大学での学びにアクセスしやすい環境を保証することは、「多様な価値観を持った人々と出会える環境や一人ひとりに合った成長機会を提供し、“自分を見つけ、らしさを磨き、社会に生きる”力を育む」という大学のブランドプロミス達成にも重要な役割を果たすと考えられる。

本稿では札幌学院大学における発達障害を含む多様な学生支援の拡充に向け、「発達障がいのある学生への教育支援事業」の一環である「令和3年度発達障がいのある学生への教育支援FD/SD研修会」において参加教職員を対象に実施したアンケート調査の結果を報告する。事後アンケート調査の結果から今回の学内FD/SD研修を評価するとともに、今後の学内研修の展開を示すことが本稿の目的である。

2. FD/SD研修と事後アンケート調査の概要

2.1 FD/SD研修会の開催方法と講師

FD/SD研修会は令和3年7月30日の13時30分～15時30分に実施された。対象は札幌学院大学に所属する全教職員（特任・非常勤を含む）で、実施方法はMicrosoft Teamsを用いた遠隔形式だった。講師は、関東にある発達障害者を対象とした就労移行支援事業所において、発達障害者の就労支援および発達障害学生の修学・就職活動支援に携わる第一著者が担当した。

2.2 FD/SD研修会の内容

FD/SD研修会は、(1)発達障害の基礎知識、(2)発達障害のある大学生との接し方、(3)発達障害のある大学生への進路・キャリア支援での工夫と配慮、(4)発達障害のある大学生への授業・試験での工夫と配慮、の4部構成で、各部ごとに質疑応答の時間が5分設けられた。また、(4)については教員のみを対象とし、職員は(3)の質疑応答後に会場から退出した。さらに、当日参加できなかった教職員を対象に、研修会の録画をオンデマンド配信した。

(1)発達障害の基礎知識では、代表的な発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠如・多動性障害、限局性学習症等）の概要や高等教育機関における発達障害学生の在籍状況、発達障害の特性に由来する修学上の困難の例を紹介した。(2)発達障害のある大学生との接し方では、発達障害学生への対応方針としてSPELLアプローチや構造化・視覚化に留意した情報提供の方法等を紹介した。(3)発達障害のある大学生への進路・キャリア支援での工夫と配慮では、第一著者の所属する支援機関における実践例やプログラムの紹介のほか、障害者雇用での就職についても紹介した。(4)発達障害のある大学生への授業・試験での工夫と配慮では、高等教育機関における合理的配慮提供のプロセスや、多様な学生の在籍を想定した事前的改善措置について紹介した。

2.3 事後アンケート調査の実施方法と項目

事後アンケート調査は以下の11項目から構成され、FD/SD研修会終了後、参加者に対してWEB上で回答を求めた。アンケートの概要を表1に示す。

(1)回答者の所属、(2)回答者の職名、(3)障害学生修学支援ネットワーク拠点校としての活動に関する知識（日本学生支援機構の「障害学生修学支援ネットワーク」では、全国の大学等から障害学生修学支援に関する様々な相談に応じる等の取組を実施しています。本学は拠点校になっておりますが、あなたは活動内容をどの程度ご存じでしたか。）、(4)代表的な発達障害に関する知識が説明できるか（代表的な発達障害（自閉スペクトラム・注意欠如／多動性障害・学習障害）について、概要を説明できますか。）、(5)発達障害学生への対応に自信があるか、(6)一般的な雇用形態と障害者雇用の違いについて説明できるか、(7)発達障害のある学生への就労支援に関する対応に自信があるか、(8)授業・試験における発達障害のある学生に対する合理的配慮について説明できるか、(9)多様な学生の在籍を想定した授業・試験における事前的介入措置について説明したり、具体例を出したりできるか、(10)本学の障がい学生支援に関する意見・要望、(11)FD/SD研修会の感想や質問。

項目(1)、(2)は選択式、(3)は「知らない」、「拠点校であることだけ知っている」、「少し知っている」、「詳しく知っている」から回答を選択してもらった。(4)～(9)はFD/SD研修会参加前の状態と、参加後の状態

表1 事後アンケート調査項目

質問番号	質問内容	回答方法	備考
(1)	ご所属を選択してください	選択式	
(2)	職名を選択してください		
(3)	日本学生支援機構の「障害学生修学支援ネットワーク」では、全国の大学等から障害学生修学支援に関する様々な相談に応じる等の取組を実施しています。本学は拠点校になっておりますが、あなたは活動内容をどの程度ご存じでしたか。	「知らない」 「拠点校であることだけ知っている」 「少し知っている」 「詳しく知っている」から選択	分析対象外
(4)	代表的な発達障害（自閉スペクトラム・注意欠如／多動性障害・学習障害）について、概要を説明できますか。	「自信がある」 「少し自信がある」 「どちらともいえない」 「あまり自信がない」 「自信がない」から選択	FD/SD 研修会前後の状態をそれぞれ評価
(5)	発達障害のある学生への対応に自信がありますか。		
(6)	一般的な雇用形態と、障害者雇用の違いについて説明できますか。		
(7)	発達障害のある学生への就労支援に関する対応に自信がありますか。		
(8)	授業・試験における発達障害のある学生に対する合理的配慮について説明できますか。		
(9)	多様な学生の在籍を想定した授業・試験における事前の介入措置について説明したり、具体例を出すことができますか。	自由記述	分析対象外
(10)	本学の障がい学生支援について、ご意見・ご要望があればぜひお聞かせください。		
(11)	そのほか、本研修会の感想や質問等ございましたら、自由にご記入ください。		

をそれぞれ「自信がある」、「少し自信がある」、「どちらともいえない」、「あまり自信がない」、「自信がない」から評価してもらった。(10)、(11)は自由記述で回答を求めた。なお、本稿では上記(1)～(11)の項目のうち、(3)、(10)以外の回答を分析対象とした。(3)、(10)の項目に対する回答はFD/SD 研修会に直接関連のない質問であり、結果は別稿にて紹介する。

3. 結果

FD/SD 研修会参加者は132名で、全教職員のうち67%であった（オンラインリアルタイム参加者とオンデマンド配信視聴者を合算）。事後アンケートには71名が回答し（教員43名、職員28名）、回答率は参加者の54%であった。

3.1 研修会参加前後の発達障害学生支援に対する意識の比較

FD/SD 研修会後、項目(4)～(9)の6つの項目につ

いて、FD/SD 研修会参加前後の状況を「自信がある」、「少し自信がある」、「どちらともいえない」、「あまり自信がない」、「自信がない」からそれぞれ評価してもらった。事後アンケートに回答した教員全体の参加前の状態に対する自己評価を図1に、参加後の状態に対する自己評価を図2に示す。同様に、事後アンケートに回答した職員全体の参加前の状態に対する自己評価を図3に、参加後の状態に対する自己評価を図4に示す。

3.1.1 研修会参加前後の教員における発達障害学生支援に対する意識の比較

教員の結果について、「代表的な発達障害に関する知識が説明できるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が37%、参加後が61%だった。「発達障害学生への対応に自信があるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が33%、参加後が46%だった。「一般的な雇用形態と障害者雇用の違

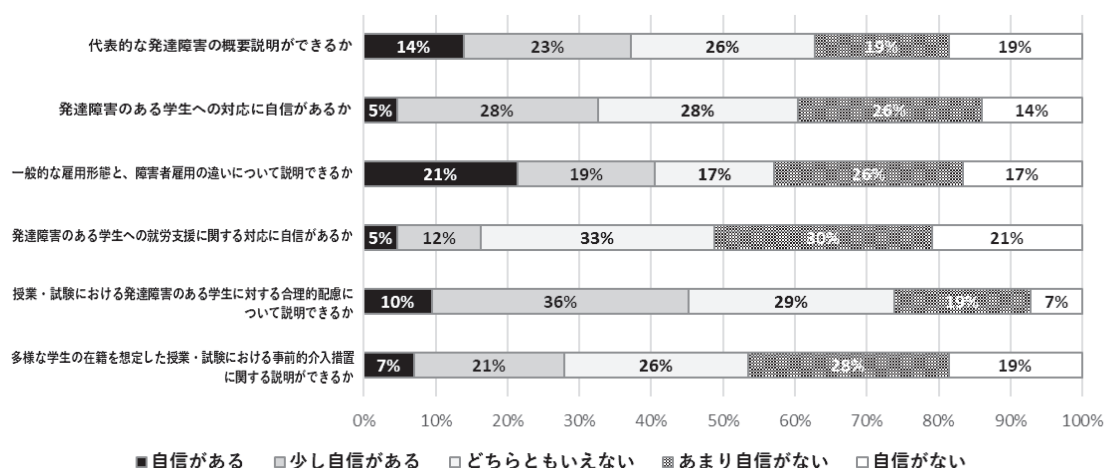


図1 教員のアンケート回答結果（FD/SD研修会前の状況に対する自己評価）

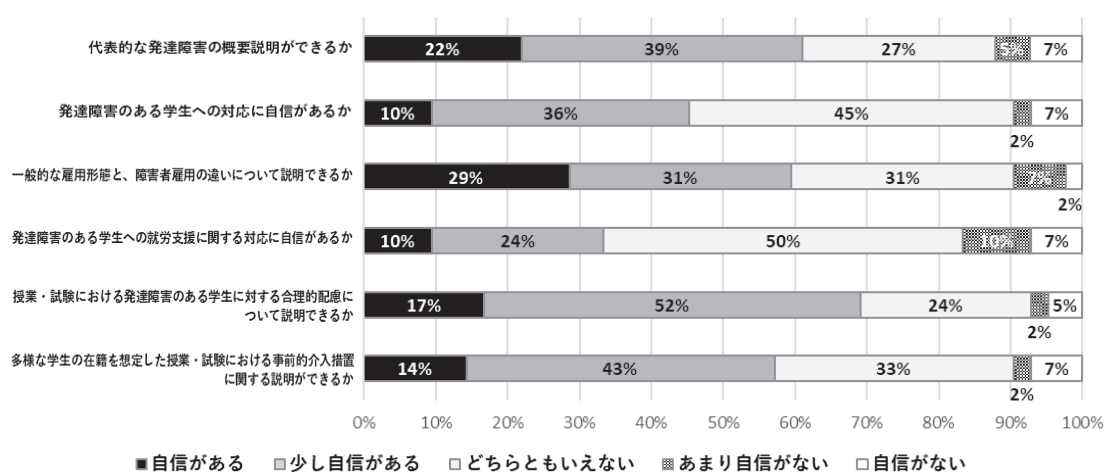


図2 教員のアンケート回答結果（FD/SD研修会後の状況に対する自己評価）

いについて説明できるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が40%、参加後が60%だった。「発達障害のある学生への就労支援に関する対応に自信があるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が17%、参加後が34%だった。「授業・試験における発達障害のある学生に対する合理的配慮について説明できるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が46%、参加後が69%だった。「多様な学生の在籍を想定した授業・試験における事前的介入措置について説明したり、具体例を出したりできるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が28%、参加後が57%だった。

3.1.2 研修会参加前後の職員における発達障害学生支援に対する意識の比較

職員の結果について、「代表的な発達障害に関する知識が説明できるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が15%、参加後が43%だった。「発達障害のある学生への対応に自信があるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が18%、参加後が29%だった。「一般的な雇用形態と障害者雇用の違いについて説明できるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が22%、参加後が61%だった。「発達障害のある学生への就労支援に関する対応に自信があるか」に対して「自信がある」、または「少し自信がある」と回答した参加者は、参加前が8%、参加後が23%だった。

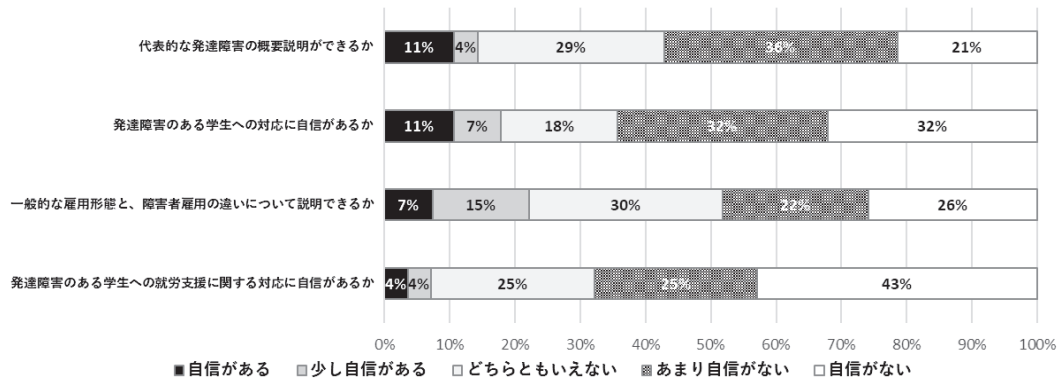


図3 職員アンケートの回答結果（FD/SD研修会前の状況に対する自己評価）

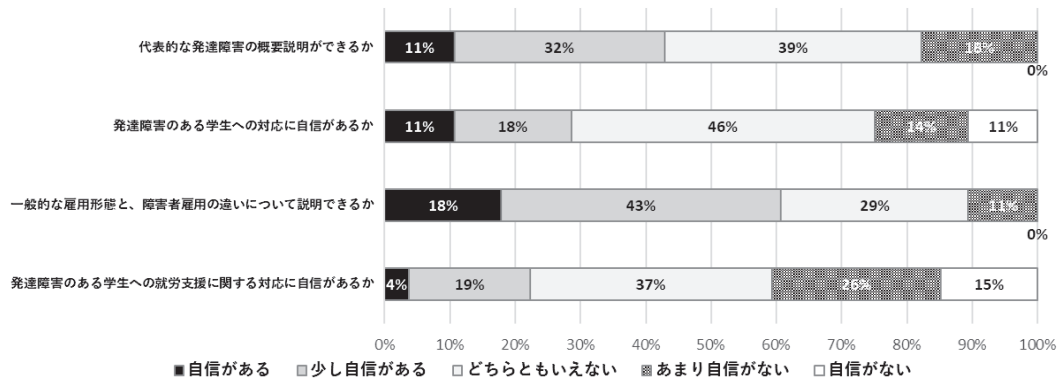


図4 職員アンケートの回答結果（FD/SD研修会後の状況に対する自己評価）

3.2 FD/SD研修会の感想や質問

FD/SD研修会の感想等に関する自由記述式の設問には、17名から回答があった。以下、自由記述回答の主な内容について『』で一部を抜粋して示す。

研修会の内容で具体的な事例や取り組みについて扱った点については、『具体的な対応例などがあり講演は理解しやすく实际的でした。』、『事例等も交えながら、大変分かりやすい内容で講演いただき、とても参考になりました。』、『実際の活動に即して具体的にご説明くださり、大変勉強になりました。キャリア支援だけでなく、ほかの場面においても学生と向き合うことができるとも汎用性の高い内容だと思いました。』といった回答が寄せられた。

また、事前的介入措置としての学びのユニバーサルデザインに関して、『障害の濃い学生に対するいろいろな配慮は、障害の薄い学生の指導にも役に立つことがわかりました。ユニバーサルデザインの考え方なのだと思います。』、『合理的配慮と教育的配慮とユニバーサルデザインの関係について勉強になりました。』といった回答があった。

その他、『これを基に、ディスカッションしたい』、

『次回はぜひ対面でできるといいですね』、『発達障害について知識を得られたことは良かったと思いますが、適切な対応ができるかと言われれば、あまり自信がありません。これからも学んでいきたいです。』というように、今後の研修会に向けた改善につながる意見や要望も寄せられた。

4. 考察

4.1 FD/SD研修会を全教職員対象に実施する意義

発達障害学生のもつ困難さや、困難さに伴い必要な支援は非常に多様である。また学生が自身の障害や特性を周囲に開示している場合もあれば、そうでない場合もある。自身の障害や特性を周囲に開示していない学生は支援部署につながりにくいことが予想される。このような状況をふまえると、発達障害学生に対する支援は学内組織、教職員同士の連携が重要であり、大学全体で対応にあたる必要がある。国立大学の障害学生支援担当者を対象とした調査（佐藤他，2020）によれば、今後高等教育機関が取り組むべき課題として予算獲得、学内連携、啓発活動（教職員の理解促進）があげられ、このことから発達障害を含む障害学生支

援に全学的な取り組みが求められていることがわかる。よって、発達障害学生への支援に関する知識は学内の一部の支援者にとどまらず、すべての教職員に必要である。

さらに近年、高等教育機関には発達障害等の障害学生に限らず多様な学生が在籍している。事後アンケート調査の自由記述回答でも、『障害の濃い学生に対するいろいろな配慮は、障害の薄い学生の指導にも役に立つことがわかりました。ユニバーサルデザインの考え方なのだと思います。』と示されているが、発達障害学生に対する支援の基礎的な知識は、多様な学生が学びにアクセスしやすい環境整備につながると考えられる。今回のFD/SD研修会のように全教職員を対象とした研修会の実施は、多様な学生に対する支援に向けた全学的な理解啓発に寄与できると考えられる。

4.2 発達障害学生支援の基礎的知識を提供する場としての機能

事後アンケートでは、発達障害学生支援に関わる知識についての自信の度合いと、対応についての自信の度合いを分けて質問した。知識については、「代表的な発達障害に関する知識が説明できるか」に対して、事前の評価では教員では38%、職員では57%が「自信がない」、または「少し自信がない」と回答した。また、同様に「一般的な雇用形態と、障害者雇用の違いについて説明できるか」に対して、教員では43%、職員では48%が「自信がない」、または「少し自信がない」と回答した。教員のみが対象の質問では「授業・試験における発達障害のある学生に対する合理的配慮について説明できるか」に対しては26%、「多様な学生の在籍を想定した授業・試験における事前の介入措置について説明したり、具体例を出したりできるか」に対しては47%が「自信がない」、または「少し自信がない」と回答した。

前述のように、札幌学院大学は我が国の障害学生支援の中心的役割を担ってきた。しかしながら事後アンケート調査に対する事前の状況に関する回答から、発達障害学生支援に関する知識に不安を抱える教職員の存在もうかがえる。一方で、事後の評価ではいずれの質問でも「自信がない」、または「少し自信がない」の回答は減少し、「自信がある」または「少し自信がある」の回答が増加しており、今回のFD/SD研修会が発達障害学生支援に関する基礎的な知識提供の場として機能

した可能性が示された。

4.3 知識を具体的支援に結びつけるためのFD/SD研修会の必要性

対応についての自信の度合いは、「発達障害学生への対応に自信があるか」、「発達障害のある学生への就労支援に関する対応に自信があるか」に回答を得た。この2項目は知識に関する項目と対応している。いずれの項目も事前の評価より事後の評価のほうが「自信がある」、または「少し自信がある」の回答が増加しているが、知識を問う設問に対する回答に比べて「自信がある」、または「少し自信がある」の回答は少ない。

例えば「代表的な発達障害について説明できるか」に対する事後の評価は、教員で61%、職員で43%が「自信がある」、または「少し自信がある」と回答しているのに対し、「発達障害学生への対応に自信があるか」に対する事後の評価として「自信がある」、または「少し自信がある」と回答したのは教員で46%、職員で29%であった。自由記述回答にも『発達障害について知識を得られたことは良かったと思いますが、適切な対応ができるかと言われれば、あまり自信がありません。』とあり、今回のFD/SD研修会は発達障害学生支援に関する基礎的な情報提供としては一定の役割を果たしたものの、研修会で得た知識を実際の支援の場に結び付けるためには研修会の内容や構成にさらに工夫が必要である。例えば具体的な事例の紹介を増やすことや、自由記述回答に寄せられたような参加者同士のディスカッションを取り入れるといった工夫が考えられる。

5. 今後の展開

本稿で取り上げたように、障害者差別解消法改正に伴い、今後は私立大学でも合理的配慮提供が義務化される。また札幌学院大学におけるこれまでの発達障害学生の入学状況を考慮すれば、引き続き発達障害学生が入学する可能性は十分考えられる。このような実態を踏まえ、一人ひとりに応じた学びへのアクセスを保証するために、今後も発達障害学生支援に関する知識を教職員全体でアップデートしていくことが必要であろう。

今回のFD/SD研修会は発達障害学生支援に関する基本的な知識の提供にとどまり、研修会で提供した知識を具体的な支援場面にどのように生かすかについて

は、内容や実施方法が不十分であったと考えられる。
参加者からの事後アンケート調査より、今後は教職員
同士のディスカッションや事例検討など、より具体的
場面に結び付くような方法で研修会を実施し、学内連
携をより円滑にするためにも FD/SD 研修会を活用す
ることが期待される。

また FD/SD 研修会参加前の評価について、本研究
では FD/SD 研修会参加後のアンケート内で参加者に
後方視的な自己評価を求めた。今後は研修会実施前後
に分けてアンケート調査を実施し、前後の状況を比較
検討することで、より有効なデータを取得することが
できると考えられる。

参考文献

- [1] 独立行政法人日本学生支援機構 (2021). 令和 2 年
度 (2020 年度) 障害のある学生の修学支援に関する
実態調査報告書.
- [2] 札幌学院大学ホームページ (2021). 札幌学院大学
障がい学生支援参考資料, [https://www.sgu.ac.jp/
campuslife/accessibility/document.html](https://www.sgu.ac.jp/campuslife/accessibility/document.html), (2021 年
12 月 13 日閲覧).
- [3] 佐藤剛介・望月直人・村田淳・後藤悠里・桑原斉・
中津真美・植田健男 (2020). 高等教育機関におけ
る障害学生支援に関するエビデンスー障害学生支
援担当者と国立大学の現状ー. 高等教育と障害, 2
(1), 1-13.

Results of the FD/SD Questionnaire on Study and Employment Support for University Students with Developmental Disabilities

Ayaka SUEYOSHI¹

and

Atsushi TANAKA²

Abstract

The 'FY2021 FD/SD Workshop on Educational Support for Students with Developmental Disabilities' was held for all faculty and staff to expand support for students, specifically those with developmental disabilities, at Sapporo Gakuin University. This paper aims to evaluate the effect of the FD/SD workshop on faculty and staff. It also provides recommendations for the future development of training within the university. After the workshop, participants were asked to fill up a web-based questionnaire. Seventy-one faculty members provided a response. Based on their responses, it was inferred that targeting all faculty and staff could contribute to university-wide understanding and awareness of the need for supporting students with diverse needs. The participants were also more confident about their knowledge of supports for students with developmental disabilities at the end of the workshop than at the beginning, indicating that the workshop may have functioned as a space for providing basic knowledge on the subject. Still, there were some faculty members who were confident in their knowledge of supports for students with developmental disabilities but not about the actual supports that could be provided to such students.

Keywords: Developmental Disabilities, Study Assistance, Employment Assistance, and FD/SD Workshop.

¹ Kaizen Co., Ltd.; sysueyoshi@kaizen-lab.com.

² Department of Human Sciences, Sapporo Gakuin University; atanaka@sgu.ac.jp.